

「噫従軍慰安碑」の碑は平和を心に刻む

～愛沢伸雄氏の授業実践～

県立安房南高校（女子校）で世界史教師だった愛沢伸雄氏は、1989年社会科教員研修で婦人保護施設「かにた婦人の村」を訪問し、「噫従軍慰安婦」碑と出会ったことを契機として、平和教育の授業をおこなった。

従軍慰安婦問題は、性に関する生々しい事実であり、ショッキングな内容である。判で押しただような「かわいそう」「悲惨」「今は平和でよかった」といった感想ではなく、戦争の事実の重さとその真実をどう受け止めるかを課題にした。ありきたりの言葉で平和や悲しみを語るのではなく、「心がこう動かされたので、このように表現した」とか、従軍慰安婦という衝撃的な事実を「このように咀嚼し、自己の心にこう位置づけた」とか、「こんな自分を発見した」などと自己を表現することを目ざした。そのために討論方式ではなく、それぞれのテーマに沿って記述方式をとりながら、各自の感想を深めるような授業づくりを心がけた。

【授業の流れ】

- 1時間目：私たちの身近にこんな大事な問題があった。～今なぜ「従軍慰安婦」問題か
- 2時間目：「城田すず子」さんの心の叫びをきこう
- 3時間目：なぜ従軍慰安婦が誕生したのか
- 4時間目：「かにた婦人の村」から世界へ訴える
- 5時間目：いま韓国ではどんな動きがあるのか
- 6時間目：なぜペ・ポンギさんは祖国に帰らなかったのか
- 7時間目：いままで学習したことをまとめてみよう
- 8時間目：従軍慰安婦問題をどう考えるか
- 9時間目：従軍慰安婦問題をどう補っていくか

城田さんの生の証言は、TBSラジオ「石の叫び」と韓国KBSテレビのドキュメンタリー「太平洋戦争の魂」を通じて発信された。これらの視聴覚資料を中心に、文献・新聞・雑誌・週刊誌等から引用したプリントを教材として準備し、段階的な授業展開とともに認識を深めていけるよう、適宜使用した。

同じ地域に住む女性として、城田さんの悲痛な叫びを聞き、強く心を動かされる。「城田さんは大変だったが、今は平和でよかった」という受け止め方は、現在を単純に平和だと見て、過去と現在を切り離した認識である。この問題で、アジアや世界の人びとが日本をどう見ているのかを理解するとともに、問題解決へ向けて一人

ひとりの日本人として重い責任があることを自覚し、認識の変容を促す。

同時に、地域教材として、婦人保護施設「かにた婦人の村」の意義を考える。公娼制度のもとで社会から見捨てられた女性たちの存在、世界の人びとの支援や城田さんの夢が大きな役割を果たしたこと、旧日本軍施設の払い下げ地であり戦争遺跡が存在すること、などを理解する。地域社会の偏見があっても、平和運動・福祉運動を進めながら、地域の人びとと積極的につながってきた。平和や文化の取り組みのなかに、城田さんはいた。

元従軍慰安婦としての証言と平和の表明は、館山の「かにた村」を発信源として、世界の良心的な人びとに共感を呼び起こし、大きな運動になっていった。従軍慰安婦問題を、典型的な日本の戦争加害であるにとらえ、どのように解決していくべきかの国際的な視点を提起した。

9時間の特設授業を通じて、表明された生徒の感想をいくつか紹介する。「戦争がなくても平和とはいえない」「過去から逃げず、今からでも見直してほしい」「平和とは、自分の思っていることを自由に言えたり、人種差別で悲しい思いをする人のいない、心が安らいで生活できること」「平和とは国民一人ひとりが支えているもので、国民が自覚しなければいつでも崩されていくもの」などである。

また、この授業を契機として、生徒たちは「自分には何ができるのか」を模索し始め、「かにた村」へのボランティア活動を行なった。さらに「かにた村」の紹介で、NGOウガンダ意識向上協会のS.センパラ氏と出会い、生徒会としてウガンダ支援活動に取り組み始めた。2000年にはウガンダに「アワミナミ洋裁学校」が開かれ、愛沢氏は2000年にウガンダ訪問。2004年に代表となりNPO法人安房文化遺産フォーラムを設立。2008年に安房南高校は統合により閉校となったが、安房高校JRC部、安房西高校JRC部へと継承され、27年目を迎えた。2006年より、安房・平和のための美術展がチャリティ基金を協賛。2018年より、安房地域の25店舗の協賛によりウガンダコーヒーキャンペーンを展開、昨年より館山総合高校も加わった。平和教育の授業実践は今も地域づくりへ発展し続けている。